

■ 「Simposio Internacional: Nuevos horizontes de los estudios de Chavín

(国際シンポジウム：チャビン研究の最前線)

山本睦 (国立民族学博物館機関研究員)

2013年11月30日(土) 国立民族学博物館第6セミナー室において、国際シンポジウム「チャビン研究の最前線」が開かれた。国立民族学博物館と科学研究費補助金基盤研究(S)「権力の生成と変容から見たアンデス文明史の再構築」(代表：関雄二)が主催し、古代アメリカ学会が協力しての開催であった。

参加者は20名で、時間が足りなくなるほど、非常に濃密で白熱した議論がおこなわれた。

発表者は、発表順にダニエル・コントラス(ドイツ・キール大学)、クリスティアン・メシア(ペルー・国立ペルー文化博物館)、ジョン・リック(アメリカ・スタンフォード大学)、井口欣也(埼玉大学)、関雄二(国立民族学博物館)の5名である。また、渡部森哉(南山大学)、松本雄一(山形大学)、芝田幸一郎(神戸市外国語大学)、山本睦(国立民族学博物館)の4名がコメンテーターをつとめた。

ジョン・リックらは、世界遺産にも登録されているペルー中部高地のチャビン・デ・ワントル遺跡で、現在、集中的な発掘調査を実施している。チャビン・デ・ワントル遺跡は、アンデス文明形成期(紀元前3000-1年)の代表的な神殿遺跡であり、アンデス文明形成期社会を論じるうえで、欠かすことのできない重要な遺跡である。しかしながら、これまでに実施された先行諸研究では、調査方法やデータの整理、成果発表などの面で不十分な点が多く、同時代の他遺跡との関係性を検証する際に問題があった。

このことをふまえて、本シンポジウムの前半では、チャビン・デ・ワントル遺跡を調査するリックら3名により最新の調査データが提示され、そのうえで、編年や空間利用、権力などに関する議論がおこなわれた。また、後半は、井口欣也と関雄二の2名によって、ペルー北部高地の形成期の神殿遺跡であるクントゥル・ワシ遺跡とパコパンバ遺跡における最新の調査成果が発表された。そして最後に、コメンテーターの発言を皮切りに、チャビン・デ・ワントル遺跡、クントゥル・ワシ遺跡とパコパンバ遺跡のデータやそれにもとづく論考について、形成期研究のボトムアップを図るべく、総合的な議論がおこなわれた。

以下は、各発表の概要である。

・ダニエル・コントラス

「チャビン・デ・ワントルにおける建築編年、土器、層位データの関係：C14年代へのベイズ統計を通じて」

本発表では、チャビン・デ・ワントル遺跡出土資料の放射性炭素年代測定データを考察する際に、ベイズ統計を用いることの有効性が検討された。

具体的には、先行研究も含めた層位データにもとづく年代測定試料を、ベイズ統計を用いて解析した結果と、ジョン・リックら調査チームによって提示された詳細な建築シーケンス、および従来用いられてきた土器シーケンスとの年代的关系が示され、土器シーケンスにはいくつかの問題があることが指摘された。

また、チャビン・デ・ワントル遺跡の編年の精緻化が、同遺跡における社会政治的不均衡の出現やその制度化といった問題への理解だけでなく、地域間交流など中央アンデス形成期研究全体の進展に極めて重要であることが述べられた。

・クリスティアン・メシア

「説得、教化、支配：チャビン・デ・ワントルにおける中間的領域からみた権力操作の戦略」

本発表では、チャビン・デ・ワントル遺跡の中心部から北に離れたワチエクサ区の発掘調査データを用いて、チャビン・デ・ワントルにおける権力をめぐる諸相が論じられた。

発掘された建築および土器などの遺物データからは、チャビン・デ・ワントルの権力者たちが、他の社会成員を支配するために多彩なシステムを構築していたことが示唆された。また、チャビン・デ・ワントルにおける権力操作に際しては、暴力性ではなく、居住のコントロール、監視、行動様式の確立、合意にもとづく継続といった戦略が用いられことが指摘された。

演者が調査したワチェックサ区の建築には、これらの戦略が顕在化しており、それはチャビン・デ・ワントルで用いられた多様な権力操作のありかたの一端を示している。そして最後に、こうした複雑な権力操作の実態を明らかにすることが、チャビン・デ・ワントルの特異性や重要性を理解することにつながると述べられた。

・ジョン・リック

「チャビン・デ・ワントルにおける発掘調査の最新成果」

演者はチャビン・デ・ワントルにおいて 1995 年から現在に至るまで調査をおこなっており、チャビン・デ・ワントル神殿の機能および社会的位置づけというテーマや、遺跡の修復保存に取り組んでいる。本発表は、そのなかでもとくに 2011～2013 年の調査成果に焦点をあてて、新たなデータを論じたものであった。

発掘調査では、建造物 C と呼ばれる主要基壇部の建設過程が明らかにされ、建造物 C で最大規模の活動がおこなわれたのは紀元前 900 - 700 年ごろであることが確認された。

特筆すべきは、建造物 C でロコ、カピーリヤ、エスプラナダと名づけられた地下回廊が設けられ、建造物 C の北側に複数の水路がはりめぐらされていたことである。発掘状況からは、これらが一部の人々のみが参加可能な秘儀的な儀礼に用いられたこと、そして相互に関連しあう複雑な水路がヘビの図像と関連する可能性が提示された。

・井口欣也

「クントゥル・ワシとチャビン問題」

本発表では、演者らにより長期の研究蓄積がなされてきたクントゥル・ワシ遺跡の詳細な発掘データにもとづいて、同遺跡における社会変化の過程、およびそれとチャビン・デ・ワントルをめぐる問題との関係が論じられた。

まず、クントゥル・ワシ遺跡において、これまでに明らかにされた詳細な建築シークエンスと緻密な土器分析の結果が示された。そして、上記のデータに、金製品を伴う特殊な埋葬や、石彫などのデータを組み合わせることで、クントゥル・ワシにおける形成期の社会過程が議論された。

また、チャビン・デ・ワントル遺跡の編年と形成期後期の「チャビン問題」について、クントゥル・ワシ遺跡の調査データを比較資料として議論がおこなわれた。具体的には、建築や土器のデータに石彫などの図像分析を加えて、チャビン・デ・ワントル遺跡で議論の対象となっている「ハナバリウ期」の編年的位置づけが論じられた。

最後には、クントゥル・ワシで最大規模の神殿更新がおこなわれたクントゥル・ワシ期における社会的状況のさらなる解明や、それらと関連した経済的活動、人口の問題など、今後の課題と展望が述べられた。

・関雄二

「クントゥル・ワシとパコパンパ：ペルー北高地における形成期の社会過程の 2 モード」

本発表は、演者らが調査を実施してきたクントゥル・ワシ遺跡とパコパンパ遺跡の比較をもとに、形成期の社会過程の特性を論じたものであった。

比較の結果、両遺跡では、建築様式、副葬品や頭蓋変形を伴う埋葬、あるいは経済的側面などの点において共通性がみられた。しかし、それと同時に、建造物の形態や年代、特殊な埋葬にみられる性差や

墓の形態、副葬品などには、明確な差異も認められた。とくに注目すべきは金属製品であり、クントゥル・ワシで金製品が多く出土するのに対し、パコパンバ遺跡では銅製品が顕著である。また、その銅製品には加工具もみられ、遺跡周辺に鉱物の採掘場も認められたことから、パコパンバは銅生産の中心であり、その生産や分配がリーダーの権力資源となったことが示唆された。

結論として、形成期の神殿間には相互交流が存在したが、権力操作のあり方は各神殿で異なるため、多様で複雑な形成期の社会過程の理解には、各神殿の特性を詳細にみていく必要性が指摘された。

(写真提供：科学研究費補助金基盤研究(S)「権力の生成と変容から見たアンデス文明史の再構築」プロジェクト)

主催：国立民族学博物館、科学研究費補助金基盤研究(S)「権力の生成と変容から見たアンデス文明史の再構築」(代表：関雄二)

協力：古代アメリカ学会